

三十三の窓

サイード・ヌルスィー

リサーレ・イ・ヌール全集より
三十三の窓

書名：三十三の窓

著者：ベディーウツザマン・サイード・ヌルスィー
トルコ語からの翻訳：ヤヒヤ・セキ

発行所：レイハン出版

発行日：2026年10月

印刷所：IMAK（イマク）〔イスタンブル〕



著作権 © レイハン出版 2026

I S B N : 978-83-63796-47-1

リサーレ・イ・ヌール全集より

三十三の窓

サイード・ヌルスィー



2026年10月

三十三番目の言葉

これは三十三の窓である。

[一面においては第三十三の書簡、
また一面においては第三十三の言葉である]

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
سُرِّيهِمْ آيَاتِنَا فِي الْأَفَاقِ وَفِي أَنْفُسِهِمْ حَتَّى يَتَبَيَّنَ
لَهُمْ أَنَّهُ الْحَقُّ أَوَّلَمْ يَكْفِ بِرَبِّكَ أَنَّهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ
شَهِيدٌ

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において。

われらは、外界の諸地平においても、また彼ら自身の内奥においても、われらの徴を示すであろう。やがて、それが真理であることが彼らに明らかとなるまで。あなたの主が、万物の上に証人であるということだけでは、なお十分ではないのか。

問

この二つの包括的な啓示句が示す、神的必然性と唯一性、ならびに主の属性と働きについて、人間という小宇宙と、宇宙という大宇宙とがいかなる仕方で証示しているのかを、簡潔かつ要約的に示してほしい。なぜなら、否認者たちはあまりにも行き過ぎ、「**وَ هُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ**」（かれは万物の上に全能である）」と言って、いつまで我々はただ手を挙げているだけなのか、と言うからである。

答

すでに記された三十三の言葉のすべては、かの啓示句の大海より汲まれ、その溢れ出る真理の海から滴り落ちた三十三の雫にすぎない。それらを見れば、答えは得られるであろう。今はただ、その大海の一滴がはね返す雫に触れるという形で、次のように述べるにとどめる。

たとえば、奇跡を示す一人の人物が壮大な宮殿を建てようとするならば、まずその基礎と根本を、整然と、しかも将来の結果と目的に適うよう、叡智をもって据える。次に、住居や区画を巧みに分け、細部を明らかにする。さらに、それらを秩序づけ、装

飾を施し、電灯によって照らす。やがて、その壮麗にして装い豊かな宮殿の中で、自らの技と恩恵を新たに示すため、各階ごとに新しい創造、変更、転換を行う。最後に、それぞれの部屋に、自らの座へと通じる電話を結び、窓を一つずつ開いて、どこからでもその座が見えるようにする。

وَ لِلّٰهِ الْمَثَلُ الْأَعْلَىٰ

最高の譬えは、アッラーに属する。

威光に満ちた創造者、叡智なる支配者、公正なる裁定者といった、数知れぬ聖なる御名によって呼ばれる比類なき創造主は、この大宇宙という宮殿と、被造の樹を創り出すことを意志された。六日のうちに、その宮殿と樹の基礎を、永遠の知の法則と叡智の規範によって据えられた。次に、高界と下界の諸階層、枝々に分け、定めと裁きの法則によって詳述し、形づくられた。さらに、あらゆる被造物の種類と階層を、制作と配慮の原理によって整えられた。その後、天を星で、地を花で飾られたように、すべての世界を、それぞれにふさわしい形で装われた。

次いで、普遍的な法則と総合的な規範の舞台において、御名の顕現をもって照らされ

た。さらに、これらの普遍法則の圧力により呻く個々の存在に対し、「慈悲あまねく慈愛深き御名」をもって、特別な形で救援を与えられた。すなわち、総合的かつ普遍的な規範の内に、個別の恩恵、個別の救済、個別の顕現が存在するのである。ゆえに、すべてのものは、あらゆる時に、あらゆる必要において、そこから助けを求め、そこへと目を向けることができる。

さらに、あらゆる住处、階層、世界、種類、個体、そして万物から、自らの存在と唯一性を示すための窓を開かれた。そして、すべての心の中に、一本の電話を置かれた。いまや、この無数の窓について、我々が限度を超えて論じることはいできない。それらは、アッラーの全知に委ねるほかない。ここではただ、クルアーンの諸徴の光として現れた三十三の窓を、第三十三の言葉・第三十三の書簡において、礼拝後の讃誦における祝福された三十三の数に合わせ、簡潔かつ要約的に示し、その詳しい説明は他の諸言葉に委ねることとする。

第一の窓

我々は明白に観察している。すべての存在、ことに生命あるものは、実に多種多様な必要と、数限りない欲求を有している。その求め、その必要は、本人が予期せず、知らず、手の届かぬ場所から、しかも最も適切でふさわしい時に与えられ、救いとして差し伸べられている。しかるに、それら無数の目的のうち、最も小さな一つにすら、当の必要者自身の力は及ばず、手も届かない。

汝自身を省みよ。外的・内的な諸感覚と、それらに付随する必需のもののために、いかに多くの事物を、自らの手では得られないまま必要としているか。すべての生命あるものを、汝自身に比してみよ。まさに彼ら一つ一つが、必然的存在の实在を証言し、その唯一性を指し示しているのみならず、それら全体の総和としては、太陽の光が太陽そのものを示すように、この状態、このあり方そのものが、不可視の幕の彼方に、一なる必然的存在、一にして唯一なる存在があることを、しかもきわめて寛大で、慈悲深く、養育し、統御する御名のもとに、理性の眼に示しているのである。

さて、無知なる否認者よ、無自覚なる放埒者よ。この叡智に満ち、洞察に富み、慈悲深いこの活動を、汝はいったい何によって説明できるというのか。耳なき自然によってか、目なき力によってか、愚かな偶然によってか、無力な不活性の原因によってか。いかにして説明し得ようか。

第二の窓

万物は、その存在と個性において、無限の可能性の道の中で揺れ動き、戸惑い、形なき状態にあるにもかかわらず、突如として、きわめて秩序正しく、叡智にかなった一つの明確な個性を与えられている。たとえば、あらゆる人間の顔には、同類のすべての人々と区別される特徴が、それぞれの小さな顔の中に備わっている。しかもその顔は、外的・内的な諸感覚を、完全な叡智をもって装備されているがゆえに、その顔そのものが、きわめて明るい唯一性の印章であることを証明している。

それぞれの顔は、幾百もの側面から、叡智なる創造者の存在を証言し、その唯一性を指し示しているのみならず、すべての顔が一体となって顕すその印章は、万物の創造

主にのみ属する刻印であることを、理性の眼に示している。

否認者よ。いかなる側面からも模倣不可能なこれらの印章と、その総体における輝かしい自存性の刻印を、いったいどの工房に帰すことができようか。

第三の窓

地表には、四十万種に及ぶ多様な群類から成る、動物と植物のあらゆる種類の大軍が存在する。

（注）それらの群類の中には、一年に生じる個体数が、アーダム時代から終末の日に至るまでに生まれた全人類の総数をも上回るものさえある。

これらすべての生類が、それぞれ異なる糧、形態、武具、衣、訓練、除隊の時期を、完璧な均衡と秩序のもとに、一つも忘れられることなく、一つも取り違えられることなく、管理され養育されているという事実は、疑いを一切受けつけない、一にして唯一なる存在の印章であり、太陽のように明白である。無限の力と、万物を包む知と、尽きることなき叡智の持ち主でなければ、

この驚異的な統治に関与することなど、誰に可能であろうか。

なぜなら、互いに入り組んだこれらの種族、群類を、一斉に管理し養育できない者が、そのうちの一つにでも手を出せば、必ず混乱を引き起こすからである。しかるに、

فَارْجِعِ الْبَصَرَ هَلْ تَرَى مِنْ فُطُورٍ

視線を返してみよ。そこに乱れや欠陥が見えるか。

この啓示の示すとおりに、いかなる混乱の徴も存在しない。ゆえに、いかなる指一本も、この統治に介入していないことが明らかなのである。

第四の窓

すべての種子が、その潜在的資質の言語をもって発する祈り、すべての動物が、その生得的必要の言語をもって捧げる祈り、そしてあらゆる困窮者が、切迫した窮状の言語をもって行う祈りが、受け入れられているという事実である。

これら無限の祈りが、観察のうえで確実に受け入れられ、応答されていることは、その一つ一つが必然的存在と唯一性を証言し、指し示しているのみならず、その総体と

しては、疑いようもなく、大いなる尺度において、慈悲深く寛大で、祈りに応える創造主の存在を示し、理性にそれを見せているのである。

第五の窓

我々は見ている。万物、とりわけ生命あるものは、まるで一挙に、きわめて短い瞬間のうちに存在へと現れる。しかるに、本来、突発的かつ瞬時に、単純な物質から生じるものは、きわめて単純で、形を欠き、技巧を伴わぬものであるはずである。それにもかかわらず、それらは高度な熟練を要する美なる造形をもって、多大な時間を要するはずの入念な文様に彩られ、多くの道具を必要とするはずの驚嘆すべき技法によって飾られ、数多の素材を要する形態として創造されている。

このように、瞬時かつ一挙に現れる驚異的な芸術と美しき構造は、それぞれが叡智なる創造者の必然的存在を証言し、その主宰の唯一性を指し示しているのみならず、その総体として、きわめて明白な形で、無限に力ある、無限に叡智なる必然的存在を示しているのである。

さて、愚鈍なる否認者よ。さあ、これを何によって説明するというのか。汝のように愚かで、無力で、無知なる「自然」によってか。それとも、無限の誤謬を重ね、かの聖なる創造者に「自然」という名を与え、その名付けを口実として、力の奇跡を自然に帰し、千重にも不可能を犯すことを望むのか。

第六の窓

انَّ فِي خَلْقِ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَاخْتِلَافِ اللَّيْلِ
وَالنَّهَارِ وَالْفُلْكِ الَّتِي تَجْرِي فِي الْبَحْرِ بِمَا يَنْفَعُ
النَّاسَ وَمَا أَنْزَلَ اللَّهُ مِنَ السَّمَاءِ مِنْ مَّاءٍ فَأَحْيَا بِهِ
الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا وَبَثَّ فِيهَا مِنْ كُلِّ دَابَّةٍ
وَتَصْرِيفِ الرِّيَّاحِ وَالسَّحَابِ الْمُسَخَّرِ بَيْنَ السَّمَاءِ
وَالْأَرْضِ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يَعْقِلُونَ

まことに、天と地の創造、夜と昼の交替、人々に益するものを積んで海を行く船、アッラーが天より下された水によって、大地をその死後に甦らせ、そこにあらゆる生き物を散布されたこと、風の転換、天と地の

間に従わせられた雲の運行には、理性ある民のための徴がある。

この啓示句は、必然性と唯一性を示すのみならず、至高の御名を指し示す、きわめて大いなる一つの窓である。

この啓示の要旨の中の要旨とは、次のことである。すなわち、宇宙の高界と下界の諸階層に存在するすべての世界が、それぞれ異なる言語をもって、ただ一つの結論、すなわち、唯一なる叡智の創造者の主宰を示しているということである。

いかにも、天界においては、きわめて重大な結果のために、きわめて秩序正しい運動が行われており、これは（宇宙学自身の認めるところであっても）、威光ある全能者の存在と唯一性、ならびに主宰の完全性を示している。

同様に、地上においても、観察によって明らかのように（地理学の証言と承認によっても）、季節の移り変わりに見られるような、重大な利益のための、きわめて秩序正しい変化が、同じくその威光ある全能者の唯一なる必然性と、主宰の完全性を示している。

また、陸と海において、完全な慈悲をもって糧を与えられ、完全な叡智をもって多様な形を授けられ、完全な主宰をもって多種多様な感覚を備えさせられたすべての動物は、それぞれがその威光ある全能者の存在を証言し、その唯一性を指し示しているのみならず、その総体として、きわめて広大な尺度において、神性の威厳と主宰の完全性を示している。

同様に、庭園における秩序正しい植物、植物が示す装い豊かな花々、花が示す均衡ある果実、果実が示す精妙な文様は、それぞれがその叡智なる創造者の必然的存在を証言し、その唯一性を指し示しているのみならず、その全体として、きわめて壮麗な形で、慈悲の美と主宰の完全性を顕しているのである。

また、いかにも、天の大気にある雲から、重大な叡智と目的、不可欠な利益と成果のために任務を与えられ、遣わされる雨の滴は、その一滴一滴の数に応じて、叡智なる創造者の必然的存在と唯一性、ならびに主宰の完全性を示している。

同様に、地上にあるすべての山々と、山中に秘められた鉱物が、それぞれ異なる性質

を備えつつ、異なる公益のために準備され、蓄えられていることは、山の堅固さにも比すべき力をもって、同じくその叡智なる創造者の必然性と唯一性、そして主宰の完全性を示している。

また、荒野や山々に点在する小さな丘が、さまざまに整った花々によって装われていることも、それぞれが叡智なる創造者の存在を証言し、その唯一性を指し示しているのみならず、その総体として、王権の威容と主宰の完成を顕している。

同様に、すべての草木に備わる無数の葉が、さまざまに整った形を持ち、それぞれ異なる配置をとり、引き寄せるような均整のとれた動きを示すことは、葉の数だけ、叡智なる創造者の必然的存在と唯一性、ならびに主宰の完全性を示している。

また、成長するあらゆる物体において、発育の時に秩序正しく行われる運動、多様な器官による装備、そして多種多様な果実へと、まるで意識あるかのように向かう志向性は、一つ一つが個別に、同じく叡智なる創造者の必然的存在を証言し、その唯一性を指し示している。そしてその総体として、きわめて大きな尺度において、力の遍在

、叡智の普遍、美なる創造、主宰の完全性を示している。

同様に、すべての動物の身体において、魂と精神を完全な叡智をもって配置し、多様な装備を完全な秩序によって備えさせ、多種多様な役割へと完全な叡智をもって遣わしていることは、動物の数、否、それらの装備の数に等しく、叡智なる創造者の必然的存在と唯一性を証言し、指し示しているのみならず、その総体として、きわめて明白な形で、慈悲の美と主宰の完成を顕している。

また、すべての心に与えられる不可視の靈感は、人間に対してはあらゆる知と真理を知らせ、動物に対しては必要とするすべての糧の備えを教えるものであり、慈悲深き主の存在を感得させ、その主宰を指し示している。

同様に、目にとっては、宇宙という園から霊的な花々を摘み取る光線のように、外的・内的なすべての感覚が、それぞれ異なる世界への鍵となっていることは、叡智なる創造者、全知なる形成者、慈悲深き創造主、寛大なる供給者の必然的存在、唯一性、

単一性、そして主宰の完全性を、太陽のように明白に示している。

以上に述べた十二の異なる窓、十二の側面から、一つの至大の窓が開かれる。それは、十二色の真理の光をもって、至高なる方の単一性と唯一性、そして主宰の完成を示すものである。

さて、不幸なる否認者よ。この地球の円周ほど、いや、その年周運動の軌道ほども広いこの窓を、汝はいったい何によって閉ざすことができようか。太陽のように輝くこの光の鉱脈を、何によって消し去ることができようか。いかなる無自覚の幕をもって、これを覆い隠すことができようか。

第七の窓

この宇宙の表面に散りばめられた被造物が示す、完全な秩序、完全な均衡、完全な装い、そしてその創出の容易さと相互の類似性、さらには一つの本性を明らかにしているという事実は、きわめて広大な尺度において、叡智なる創造者の必然的存在、完全な力、そして唯一性を示している。同様に、無生で単純な元素から、無数にして相異なり、しかも秩序正しい複合体が創り出さ

れることも、その複合体の数に応じて、同じくその叡智なる創造者の必然的存在を証言し、その唯一性を指し示している。そしてその総体として、きわめて明白な形で、その完全な力と唯一性を顕している。

さらに、存在の構成と分析、すなわち生成と分解の過程において、極度の混合と錯綜の中にありながら、極度の識別と分離が行われていること、たとえば、土中において種子や根がきわめて入り混じっているにもかかわらず、いささかも誤ることなく穂を出し、それぞれの存在を識別し分離すること、また樹木に入り込む混合した物質を、葉や花や果実へと分け分けること、さらに身体の細胞へ混然として送られる栄養物を、完全な叡智と完全な均衡をもって選別し分配することは、絶対的叡智者、絶対的全知者、絶対的全能者の必然的存在、完全な力、そして唯一性を明らかに示している。

同様に、微粒子の世界を、無限に広大な耕地のごときものとし、刻々に完全な叡智をもって播種し収穫し、そこから新たな宇宙の産物を取り出し、しかも本来、無生で無力で無知なるはずの微粒子に、きわめて意識的で、きわめて叡智的で、きわめて力強い、無数の秩序正しい役割を果たさせてい

ることは、威光ある全能者、完全なる創造者の必然的存在、完全な力、主宰の威厳、唯一性、そして主宰の完成を示している。

以上の四つの道によって、認識としての神を知るための大いなる一つの窓が開かれ、きわめて広大な尺度において、叡智なる創造者の存在が理性に示されるのである。

さて、不幸なる無自覚者よ。このような状態において、なお彼を見ようとせず、知ろうとしないのであれば、理性を投げ捨て、獣となってしまえばよい。そうすれば、責めもなく、安らぐであろう。

第八の窓

人類におけるすべての輝ける魂の主である預言者たちは、その内的・外的な奇跡に拠り、また、すべての光り輝く心の極である聖者たちは、その開示と奇蹟に信を置き、さらに、すべての光明ある理性の担い手である真理探究者たちは、その厳密な究明に拠って、ただ一なる唯一者、必然的存在、万物の創造主の必然的存在と唯一性、ならびに主宰の完成を証言している。この証言は、きわめて大きく、光に満ちた一つの窓

であり、しかも常に、その主宰の位階を示し続けている。

ああ、哀れなる否認者よ。汝はいったい誰を頼りとして、これらの声に耳を傾けないのか。それとも、真昼に目を閉じることで、世界が夜になったとでも思い込むのか。

第九の窓

宇宙に遍在する普遍的な奉仕と崇拜の営みは、疑いなく、絶対的な被崇拜者の存在を示している。実に、霊的世界と内奥の次元へ赴き、霊的存在や天使たちと交わる人々の証言によって確立された、すべての霊的存在と天使たちが、完全な服従をもって礼拝に従事していること、また、すべての生命あるものが、観察の上で明らかなように、完全な秩序のもと、奉仕的な任務を果たしていること、さらに、元素のごときすべての無生物でさえ、完全な従順さをもって、奉仕としての役割を担っていることは、真実にして正当なる被崇拜者の必然的存在と唯一性を示している。

同様に、それぞれの集団が合意と伝承の力を備えている、すべての知者たちの真実なる認識、すべての感謝者たちの実りある感

謝、すべての想起者たちの恵みに満ちた想起、すべての賛美者たちの恩恵を増す賛美、すべての一神信仰者たちの証明を伴う唯一化と称揚、すべての愛する者たちの真実なる愛と恋慕、すべての志願者たちの誠実な意志と希求、すべての回帰者たちの真摯な求願と立ち返りは、知られ、想起され、感謝され、讃えられ、一にして唯一であり、愛され、望まれ、求められる、永遠なる被崇拜者の必然的存在、主宰の完成、そして唯一性を示している。

さらに、完成された人間における、すべて受け入れられた礼拝と、その礼拝の結果として生じる霊的流入、祈念、直観、開示は、始原なき存在にして終極なき被崇拜者の必然的存在、唯一性、そして主宰の完成を、改めて明らかにしている。

以上の三つの側面から、光に満ちた大いなる一つの窓が、唯一性へと開かれているのである。

第十の窓

وَأَنْزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَخْرَجَ بِهِ مِنَ الثَّمَرَاتِ رِزْقًا
لَكُمْ وَسَخَّرَ لَكُمُ الْفُلْكَ لِتَجْرِيَ فِي الْبَحْرِ بِأَمْرِهِ

وَسَخَّرَ لَكُمُ الْيَوْمَ الْفَجَرَ وَسَخَّرَ لَكُمُ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ
 دَائِبِينَ وَسَخَّرَ لَكُمُ اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ وَآتَاكُم مِّنْ كُلِّ مَا
 سَأَلْتُمُوهُ وَإِن تَعُدُّوا نِعْمَتَ اللَّهِ لَا تَحْصُوهَا

この宇宙において、存在するすべてのものが、互いに助け合い、呼応し、支え合っているという事実は、あらゆる被造物が、ただ一人の養育者の養育のもとにあり、ただ一人の統御者の支配のもとにあり、ただ一人の主宰者の統治のもとにあり、ただ一人の主人の僕として仕えていることを示している。

なぜなら、地上の生命あるもののために、生存に必要な諸条件を、主の命によって調理する太陽と、暦を司る月から始まり、光、空気、水、食物が生命あるものの救援へと走り、植物が動物の救援へと走り、動物が人間の救援へと走り、さらには身体の諸器官が互いの補助へと向かい、ついには食物の微粒子が身体の細胞の救援へと向かうに至るまで、あらゆる段階において、一つの相互扶助の法則が貫かれているからである。

このように、本来は無生で無意識であるはずの、互いに助け合うこれらの存在が、寛大の法則、慈愛の規範、慈悲の原理のもとに、きわめて叡智的に、きわめて寛大に互いを助け合い、互いの必要の呼び声に応答し、互いを強め合っているという事実は、疑いなく、ただ一にして唯一なる存在、独一にして自存なる方、絶対的全能者、絶対的全知者、絶対的慈悲者、絶対的寛恕者である必然的存在の僕であり、命を受けた者であり、その創造物であることを明白に示している。

さて、哀れなる破産した哲学者よ。この壮大なる窓について、汝は何と言うのか。汝のいう偶然が、ここに介入できるというのか。

第十一の窓

أَلَا بِذِكْرِ اللَّهِ تَطْمَئِنُّ الْقُلُوبُ

すべての魂と心が、迷妄から生じる混乱と錯綜、またその混乱から生じる霊的な苦悩から解き放たれるのは、ただ一なる創造主を知ることによってである。万物を一なる

創造者に帰すことによって救済を見いだし、一なるアッラーの想起によってのみ、心は静まり、安らぐのである。

なぜなら、無数の存在を一なる存在に帰さないならば（第二十二の言葉において断固として証明されたように）、そのときには、あらゆる一つ一つの事物を、無数の原因に帰さねばならなくなるからである。そうなれば、一つの事物の存在は、全存在と同じほど困難なものとなる。アッラーに帰すならば、無数の存在を一なる方に帰すのであり、帰さないならば、一つ一つを無数の原因に帰すことになる。その場合、一つの果実の存在は、宇宙全体に匹敵するほどの困難を生じ、否、それ以上に困難となる。

たとえば、一人の兵士が百人の異なる指揮官の統率に委ねられれば、百の困難が生じる。しかし、百人の兵士が一人の将校の統率に委ねられれば、一人の兵士を扱うのと同じほど容易となる。同様に、多種多様な原因が、一つの事物の創出において一致することは、百倍の困難を伴うが、数多の事物の創出を一なる方に帰すならば、百倍の容易さが生じる。

かくして、人間の本性に内在する、真理への好奇と探求から生じる無限の苦悩から救い出すものは、ただ創造主の唯一性と、神の認識とをにおいて他にない。背信と多神崇拜の中には、無限の困難と苦悩がある以上、その道は不可能であり、真理ではありえない。他方、唯一信仰の中には、存在の創造に見られる容易さ、多様性、美なる造形に即した、無限の容易さと安らぎがある以上、その道こそが必然であり、真理なのである。

さて、不幸なる迷妄の徒よ。見よ、迷妄の道はいかに暗く、いかに苦痛に満ちているか。いったい何の必要があって、そこを歩むのか。また見よ、信仰と唯一信仰の道はいかに容易で、いかに喜びに満ちているか。そこへ入れ。そうすれば救われる。

第十二の窓

سَبِّحْ اسْمَ رَبِّكَ الْأَعْلَى
الَّذِي خَلَقَ فَسَوَّى وَالَّذِي قَدَّرَ فَهَدَى

この啓示の示す奥義によれば、万物、ことに生命ある被造物においては、あたかも叡智ある鋳型から打ち出されたかのように、

それぞれに秩序ある分量と形姿が、叡智をもって与えられている。しかも、その形と分量のうちには、諸々の利益と効用のために、あえて曲がりくねった境界や不均整が備えられている。

さらに、生命の期間において次々と替えられる姿形や量においても、それらは常に叡智と公益に適う仕方で定められており、生の定めから構成された、霊的で秩序ある一つ一つの形、一つ一つの分量が存在している。

このことは、疑いなく示している。すなわち、威光ある全能者、完成において叡智なる方の定め領域において、その形と構造が配され、力の工房において存在を与えられた、かの無数の被造物は、その方の必然的存在を示し、その唯一性と力の完成を、無数の言語をもって証言しているのである。

汝自身の身体とその諸器官、そしてそれらに見られる曲がりくねった箇所が生み出す成果と利益とを見よ。そこに、叡智の完成のうちに顕れる、力の完成を見るであろう。

第十三の窓

وَإِنْ مِنْ شَيْءٍ إِلَّا يَسْبِحُ بِحَمْدِهِ

この啓示の奥義によれば、万物はそれぞれ固有の言語をもって、その創造主を想起し、清め讃えている。実に、あらゆる存在が、状態の言語と本性の言語とをもって行う称揚は、ただ一なる聖なる存在の存在を示している。そもそも、本性による証言は否定しえず、状態による指示は、とりわけ多方面から重なって示されるとき、いささかの疑念も許さない。

見よ。無数の本性的証言を内包し、無限の様態において状態の言語によって指示し、あたかも重なり合う円環のごとく、一つの中心へと向かうこの存在群の、秩序正しい形姿は、それぞれが一つの言語である。その均整ある構えは、それぞれが証言の言語である。その完成された生命は、それぞれが称揚の言語である。第二十四の言葉において断固として証明されたとおり、これらすべての言語によって、きわめて明白な仕方で行われる称揚と礼敬、そしてただ一なる聖なる存在への証言は、光が太陽を示す

がごとく、必然的存在なる一者を示し、その神性の完成を指し示しているのである。

第十四の窓

قُلْ مَنْ بِيَدِهِ مَلَكُوتُ كُلِّ شَيْءٍ * وَإِنْ مِنْ شَيْءٍ إِلَّا
عِنْدَنَا خَزَائِنُهُ * مَا مِنْ دَابَّةٍ إِلَّا هُوَ آخِذٌ بِنَاصِيَتِهَا *
إِنَّ رَبِّي عَلَى كُلِّ شَيْءٍ حَفِيزٌ

この啓示の奥義によれば、あらゆる存在は、そのすべての状態と、すべての働きにおいて、ただ一なる威光の創造主を必要としている。

実に、宇宙に存在する被造物を見れば、我々はそこに、絶対的な弱さの中に現れる絶対的な力の顕現を見る。また、絶対的な無力の中に、絶対的能力の痕跡を見る。

たとえば、植物の種子や根に秘められた生命の結節が、目覚めの時に示す驚異的な状態のごときものである。

また、絶対的な貧しさと乾燥の中に、絶対的な豊かさの顕現を見る。冬における大地と樹木の貧しげな姿と、春におけるその壮麗な富と豊穡のごときものである。

さらに、絶対的な無生性の中に、絶対的生命の滴りを見る。無生の元素が、生命ある物質へと転化することのごときものである。

また、絶対的な無知の中に、万物を包む意識の顕現を見る。微粒子から星々に至るまで、あらゆるものの運動が、宇宙の秩序、生命の利益、叡智の目的に適う仕方で進行し、まるで意識を備えているかのような状態を示していることのごときものである。

このように、無力の中に現れる能力、弱さの中に現れる力、貧しさの中に現れる富と豊穡、無生と無知の中に現れる生命と意識は、疑いなく、また必然的に、絶対的全能者、絶対的強者、絶対的富裕者、絶対的全知者、生ける自存者なる一者の必然的存在と唯一性に向かって、あらゆる方向から窓を開いている。

それらの総体は、きわめて広大な尺度において、光に満ちた一本の大道を示している。

さて、自然という泥沼に落ち込んだ無自覚者よ。もし自然を捨て、神の力を認めないのであれば、あらゆる存在に、否、一つ一つの微粒子にさえ、無限の力と能力、果て

しなき叡智と技巧、さらには大多数の存在
を見、知り、統御しうるだけの権能が備わ
っていると認めねばならなくなるのである
。

第十五の窓

الَّذِي أَحْسَنَ كُلَّ شَيْءٍ خَلَقَهُ

この啓示の奥義によれば、あらゆる存在に
対して、その本性に備わる能力に応じて、
完全な均衡と秩序をもって形が定められ、
美なる技巧によって構成されている。そし
て、最も短い道を通じて、最も美しい姿に
おいて、最も軽やかな仕方で、最も容易に
使用できる形で存在を与えられている。

たとえば、鳥たちの衣装を見よ。また、彼
らがその羽を、いつでも容易に動かし、用
いることのできる様子を見よ。

さらに、それらは浪費なき、叡智に満ちた
仕方で存在を与えられ、形を授けられてい
る。

このような事実は、存在の数だけ存在する
言語をもって、叡智なる創造者の必然的存
在を証言し、絶対的全能にして全知なる存
在を指し示しているのである。

第十六の窓

地表において、季節ごとに新たにされる被造物の創造と統御のうちに見られる秩序と配置は、疑いなく、普遍的な叡智を示している。属性は、それを有する主体なしには存在しえない以上、その普遍的叡智は、必然的に一なる叡智者を示している。

また、その叡智の幕の内に見られる驚異的な装飾は、疑いなく、完全なる配慮を示している。そして、その完全なる配慮は、必然的に、配慮を施す寛大なる創造主を示している。

さらに、その配慮の幕の中に、万物に遍く及ぶ慈愛と恩恵が存在することは、疑いなく、広大なる慈悲を示している。そして、その広大なる慈悲は、必然的に、慈悲あまねく慈愛深き存在を示している。

また、その慈悲の幕の上において、糧を必要とするすべての生命あるものが、それぞれにふさわしく、完全な仕方で養われ、糧を与えられていることは、疑いなく、養育者としての供給と、慈愛に満ちた主宰を示している。そして、その養育と統治は、必然的に、寛大なる供給者を示している。

実に、地上において、完全な叡智をもって養育され、完全な配慮をもって装飾され、完全な慈悲をもって恩恵を施され、完全な慈愛をもって養われているすべての被造物は、それぞれが、叡智にして寛大、慈悲深く、供給を司る創造主の必然的存在を証言し、その唯一性を指し示している。

同様に、地表全体に現れ、その全体において観察され、意志と目的を疑いなく示している普遍的叡智を見よ。また、その叡智を内包し、あらゆる被造物に遍く及ぶ完全なる配慮を見よ。そして、その配慮と叡智を含み、地上のすべての存在を包み込む広大な慈悲を見よ。さらに、その慈悲、叡智、配慮をも内包し、すべての生命あるものに遍く及び、きわめて寛大な仕方で行われる普遍的な糧の供給と養育を、同時に観察せよ。

七つの色彩が集まって光を形成するように、そして大地を照らすその光が、疑いなく太陽を示すように、この叡智の内にある配慮、配慮の内にある慈悲、慈悲の内にある糧の供給は、限りなく叡智に満ち、寛大で、慈悲深く、供給を司る必然的存在の唯一性と、主宰の完成を、きわめて広大な尺度

において、高き次元において、燦然と示しているのである。

さて、愚鈍にして無自覚なる否認者よ。眼前に展開する、この叡智に満ち、寛大にして慈悲深く、糧を与える養育を、また、この驚嘆すべき奇跡的な現象を、汝はいったい何によって説明できるというのか。

汝のように放浪する偶然によってか。あるいは、汝の心のように盲いた力によってか。あるいは、汝の頭脳のように耳なき自然によってか。あるいは、汝のように無力で、無生で、無知なる原因によってか。

それとも、限りなく聖にして超越し、あらゆる欠陥から清められ、高みにあり、しかも無限に全能にして全知、聞き、見給う威光の主に対して、「自然」という名を与え、その自然を、無限に無力で、無知で、耳なく、目なく、可能的存在にすぎぬ哀れなものとしながら、無限の誤謬を犯そうというのか。

さらに、太陽のように明白なるこの真理を、汝はいかなる力によって消し去ることができようか。いかなる無自覚の幕の下に、これを覆い隠すことができようか。

第十七の窓

إِنَّ فِي السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ لَآيَاتٍ لِّلْمُؤْمِنِينَ

夏の季節に地表を観察するとき、我々は見
る。万物の創造において、本来なら混乱と
無秩序を引き起こすはずの、無限の豊潤さ
と絶対的な施与が、きわめて高度な調和と
秩序の中に現れていることを。見よ、地表
を飾るすべての植物を。

また、本来なら不均衡と粗雑さを招くはず
の、創造における絶対的な速度が、完全な
均整のうちに現れている。見よ、地表を装
うすべての果実を。

さらに、本来なら無価値、否、醜悪さを招
くはずの絶対的多数性が、完全なる芸術美
の中に現れている。見よ、大地を金彩のよ
うに輝かせるすべての花々を。

また、本来なら技巧の欠如と単純さを招く
はずの、創造における絶対的な容易さが、
無限に近い技巧、熟練、周到さの中に現れ
ている。見よ、地上の樹木と植物の器官に
とって、宝箱であり、設計図であり、その
生命史を封じ込めた小箱でもある、すべての
の種子と核を。

さらに、本来なら差異と分離を招くはずの絶対的な距離と隔たりが、完全なる一致の中に現れている。見よ、地上のあらゆる地域に蒔かれた、すべての穀物の種を。

また、本来なら混濁と混合を引き起こすはずの完全な混在が、逆に、完全な識別と分離の中に現れている。見よ、地下に混然として撒かれ、物質的には互いに似通っている種子が、穂を出す時には完全に識別されている様を。また、樹木に入り込むさまざまな物質が、葉、花、果実へと、完全な識別をもって分けられている様を。また、胃に入る混合した食物が、異なる器官と細胞に応じて、完全な識別をもって分配されている様を。

そこに、完全なる叡智の中に現れる、完全なる力を見よ。

さらに、本来なら無価値と卑小さを招くはずの、きわめて豊富な多産性と極度の廉価さが、地上においては、被造物と芸術性において、きわめて高価で貴重な様相をもって現れている。見よ、この無数の驚異的芸術の中において、ラフマーンの食卓たる地上に並べられた、力の甘味にすぎぬ桑の実

の諸種を。完全なる芸術の中に現れる、完全なる慈悲を見よ。

このように、地表全体において、きわめて高い価値と共に存在する無限の廉価さ、無限の廉価さの中にありながら存在する無限の混合と交錯、しかもその混合の中に現れる無限の識別と分離、さらにその識別と分離の中にありながら存在する、広大な隔たりにもかかわらぬ極度の一致と類似、そして極度の類似の中にありながら、きわめて容易かつ簡明でありながら、きわめて入念に造られていること、また、そのきわめて美しい造形の中にありながら、絶対的な速度と迅速さと共に、完全な均衡と節度と浪費のなさが存在すること、さらに、その完全なる無駄のなさの中にありながら、極度の多数性と豊富さと共に、最高度の芸術美が存在すること、そして、その最高度の芸術美の中にありながら、無限の寛大さと共に、絶対的秩序が存在すること。

これらすべては、昼の光が太陽を示すように、威光ある全能者、完成において叡智なる方、美において慈悲深き方の必然的存在、力の完成、主宰の美、唯一性、そして単一性を証言している。

لَهُ الْأَسْمَاءُ الْحُسْنَى

この奥義を示しているのである。

さて、哀れなる無知にして無自覚、しかも頑迷なる否認者よ。この至大なる真理を、汝はいったい何によって説明できるというのか。この極限まで奇跡的で驚異的な現象を、何によって解釈できるというのか。この無限に不思議なる芸術を、いったい何に帰することができるのか。

この地球ほど広大な窓を、いかなる無自覚の幕によって覆い隠すことができようか。汝のいう偶然はいったいどこにあるのか。汝が「自然」と呼び、頼みとしている無意識なる仲間、迷妄における支柱、伴侶はいったいどこにいるのか。

この働きに偶然が介入することは、百重に不可能ではないのか。そして、この驚異的な営みの千分の一でさえ自然に委ねることは、千倍にも不可能ではないのか。

それとも、無生で無力なる自然の中に、それぞれの存在の内部ごとに、その存在から造られる事物の数に等しいほどの、霊的な機械と印刷工房とが備わっているとでもいうのか。

第十八の窓

أَوَلَمْ يَنْظُرُوا فِي مَلَكُوتِ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ

第二十二の言葉において説明された譬えを見よ。いかにも、完全で、秩序正しく、芸術的な、まるで宮殿のような作品は、疑いなく、秩序ある行為を示している。すなわち、一つの建築は、一つの大工仕事を示しているのである。

また、完全で秩序ある行為は、必然的に、完全なる行為者、熟練した職人、すなわち一人の大工を示している。そして、「完全なる職人」「熟達した大工」という称号は、疑いなく、完全なる属性、すなわち芸術的技能を示している。

さらに、完全なる属性と、その完全なる芸術的能力は、疑いなく、完全なる素質の存在を示している。そして、完全なる素質は、高貴なる魂と高遠なる存在を示している。

同様に、地表を、否、宇宙全体を満たしている絶えず更新される作品群は、疑いなく、きわめて完成された行為を示している。そして、この極限まで秩序と叡智に満ちた

行為は、疑いなく、その称号と御名が完全なる一者を示している。

なぜなら、秩序正しく、叡智に満ちた行為が、行為者なしに存在しえないことは、断固として明白だからである。

また、極度に完全な称号は、その行為者の極度に完成された属性を示している。ちょうど、文法学において、行為者名詞が動詞語根から派生するように、称号や御名もまた、その源泉と起源を属性に有しているのである。

さらに、極度に完成された属性は、疑いなく、極度に完成された本質的働きを示している。そして、我々が十分に言葉で表現できぬほど完全なる、その本質的働きは、真に確実な認識をもって、無限の完成を備えた一なる存在を示しているのである。

このように、全宇宙におけるあらゆる芸術の痕跡と、すべての被造物は、それぞれが一つの完全なる作品である以上、それぞれが一つの行為を示し、その行為は御名を、御名は属性を、属性は本質的働きを、本質的働きは本体を証言している。

ゆえに、被造物の数だけ、それぞれが威光ある創造主の必然的存在を証言し、その単一性を指し示しているのである。

さらに、それらの総体は、被造の連鎖の数ほど強力な仕方で、一つの認識への昇階となっている。それは、いかなる側面からも疑念の入り込む余地なき、連続した真理の証明なのである。

さて、哀れなる無自覚の否認者よ。宇宙の連鎖に等しい強さを持つこの証明を、汝はいったい何によって打ち砕くことができるのか。

この被造物の数だけ真理の光線を示している、無数の孔と格子を備えたこの窓を、何によって閉ざすことができるのか。いかなる無自覚の幕を、その上に垂らすことができるのか。

第十九の窓

تَسْبِيحٌ لَهُ السَّمَوَاتُ السَّبْعُ وَالْأَرْضُ وَمَنْ فِيهِنَّ وَإِنْ
مِنْ شَيْءٍ إِلَّا يَسْبِحُ بِحَمْدِهِ

七つの天と地、その中にあるすべてのものは、かれを讃えて称揚している。存在する

いかなるものも、かれを讃えて称揚しないものはない。

この奥義によれば、威光ある創造主は、天体に対して、実に多くの叡智と意味を備え付けられた。あたかも、自らの威厳と美を表現するために、天を、太陽、月、星々という言葉によって飾られたかのようである。

また、天空に存在する諸存在にも、多くの叡智、意味、目的を備え付けられた。まるで、その天空に、稲妻、閃光、雷鳴、雨滴という言葉を読ませているかのようである。そして、それによって、叡智の完成と慈悲の美とを教示している。

さらに、地という頭部を、「動物」や「植物」と呼ばれる意味深き言葉によって語らせ、自らの芸術の完成を宇宙に示しているように、その頭部を構成する一つ一つの言葉である植物や樹木にも、葉、花、果実という言葉を読ませ、再びその芸術の完成と慈悲の美を宣言している。

また、一つ一つの言葉である花と果実にも、種子という言葉を読ませ、その精妙なる芸術と主宰の完成を、知性ある者たちに教えている。

この無数の称揚の言葉の中から、我々はただ一つの穂と、一輪の花の語り方だけに耳を傾け、それがいかに証言しているかを知ろう。

実に、それぞれの植物、それぞれの樹木は、多くの言語をもって、その創造主を示している。そのため、注意深き者たちは驚嘆に包まれ、それを見る者は、「至高なるアッラーよ。何と美しく証言していることか」と言わずにはいられないのである。

実に、あらゆる植物が花を開く時、また穂を実らせる時、その微笑むかのような霊的語りの最中に行う称揚は、それ自身と同じく美しく、しかも明白である。

なぜなら、それぞれの花の美しき口を通じて、また整然たる穂の言語を通じて、さらに均整ある種子と秩序正しい穀粒の言葉を通じて語られる、その叡智を示す秩序は、観察の上で明らかに、知を示す均衡の中に存在しているからである。

そして、その均衡は、芸術的熟練を示す造形の中にある。また、その造形は、恩寵と寛大さを示す装飾の中にある。さらに、その装飾は、慈悲と恩恵を示す繊細な芳香の中にある。

このように、互いに重なり合うこれら意味深き様相は、実に一つの証言の言語である。それは、その美に満ちた創造主を、御名によって語り、その属性によって描写し、御名の顕現を解き明かし、さらに、その愛され、知られることへの望み、すなわち、自らを愛させ、自らを認識させようとする意志を表現している。

もし、一輪の花からこのような証言を聞くならば、ましてや、地表に広がる主の庭園において、すべての花々の声を聞くことができたならば、それらがいかなる強大な力をもって、威光ある創造主の必然的存在と唯一性を宣言しているかを知るであろう。

その時なお、汝に疑念や迷い、無自覚が残りうるだろうか。もし残るのであれば、もはや汝を人間、あるいは知性ある存在と呼ぶことができようか。

さあ今、一樹の木を注意深く見よ。春の季節に、葉が秩序正しく萌え出で、花々が均整をもって咲き、果実が叡智と慈悲のうちに育ち、枝という手の上で、無垢な子供たちのように、そよ風に吹かれて戯れている。その中にある精妙なる口を見よ。

寛大なる御手によって緑に染まる葉の言葉によって、恩寵の喜びをもって微笑む花々の言葉によって、慈悲の顕現をもって笑う果実の言葉によって表現される、叡智ある秩序の中の公正なる均衡を見よ。また、公正を示すその均衡の中にある精緻な技巧と紋様を見よ。そして巧みな紋様と装飾の中に、慈悲と恩恵を示すそれぞれ異なる甘美な味わいと、それぞれ異なる芳香があり、さらにそれらの心地よい味わいの中には、それぞれが御力の奇跡である種子と核がある。

これらすべては、極めて明白な仕方で、叡智ある創造主、寛大なる御方、慈悲深き御方、善を施す御方、恩恵を授ける御方、美しく飾る御方、優越した賜物を授ける御方の必然的存在と唯一性、慈悲の美、そして主宰の完全性を示しているのである。

もし汝が、地上のすべての樹木がその有様によって語る言葉に、一斉に耳を傾けることができたならば、

يُسَبِّحُ لِلَّهِ مَا فِي السَّمَوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ

という宝庫の中に、いかに美しい宝玉が秘められているかを、目の当たりにし、理解するであろう。

さて、恩知らずのうちに自らを放任された存在と思い込んでいる、不幸なる無自覚者よ。このように無数の言葉によって、御自身を汝に知らしめ、認識させ、愛させておられる、美を具えた寛大なる御方を認めようとしないのであれば、これらの言葉を沈黙させねばならない。

しかし、それらを沈黙させることができない以上、耳を傾けねばならない。無自覚のうちに耳を塞いだところで、逃れることはできない。なぜなら、汝が耳を塞いでも、宇宙は沈黙せず、存在するものたちは黙らず、唯一性の証人たちはその声を止めないからである。

それらは必ずや、汝に対して証言を下すのである。

第二十の窓

(注) この第二十の窓の真理は、ある時、アラビア語の形で心に次のように到来した。

تَلْئَلُ الضَّيَاءِ مِنْ تَنْوِيرِكَ تَشْهِيرِكَ * تَمْوُجُ الْأَعْصَارِ مِنْ
تَصْرِيفِكَ تَوْظِيفِكَ سُبْحَانَكَ مَا أَعْظَمَ سُلْطَانَكَ * تَفْجَرُ الْأَنْهَارُ
مِنْ تَدْخِيرِكَ تَسْخِيرِكَ تَزِينُ الْأَحْجَارِ مِنْ تَدْبِيرِكَ تَصْوِيرِكَ *
سُبْحَانَكَ مَا أَبَدَعَ حِكْمَتَكَ تَبَسُّمُ الْأَزْهَارِ مِنْ تَزْيِينِكَ تَحْسِينِكَ

* تَبْرُجُ الْأَثْمَارَ مِنْ أَنْعَامِكَ أَكْرَامِكَ سُبْحَانَكَ مَا أَحْسَنَ
صَنَعَتِكَ * تَسْجَعُ الْأَطْيَارُ مِنْ أَنْطَاقِكَ أَرْفَاقَكَ تَهْزُجُ الْأَمْطَارُ
مِنْ أَنْزَالِكَ أَفْضَالَكَ * سُبْحَانَكَ مَا أَوْسَعَ رَحْمَتِكَ * تَحْرُكُ
الْأَقْمَارُ مِنْ تَقْدِيرِكَ تَدْبِيرِكَ تَدْوِيرِكَ تَنْوِيرِكَ * سُبْحَانَكَ مَا
أَنُورُ بُرْهَانِكَ مَا أَبْهَرُ سُلْطَانِكَ

فَسُبْحَانَ الَّذِي بِيَدِهِ مَلَكُوتُ كُلِّ شَيْءٍ * وَإِنْ مِنْ
شَيْءٍ إِلَّا عِنْدَنَا خَزَائِنُهُ وَمَا نُنْزِلُهُ إِلَّا بِقَدَرٍ مَعْلُومٍ *
وَ أَرْسَلْنَا الرِّيَّاحَ لَوَاقِحَ فَأَنْزَلْنَا مِنَ السَّمَاءِ مَاءً
(مُبَارَكًا) فَاسْقِينَاكُمْوهُ وَ مَا أَنْتُمْ لَهُ بِخَازِنِينَ

いかにも、個別の事物、結果、細部において、完全なる叡智と芸術の美が見られるように、偶然的で混乱していると思われる普遍的元素や巨大な被造物の、一見混沌とした状態さえも、実は叡智と芸術によって形づくられているのである。

見よ。光の輝きは、そのほかの叡智に満ちた奉仕が示しているように、主の許しによって、地上における神的作品を展示し、宣

揚するためのものである。すなわち、光は叡智なる創造主によって用いられているのである。宇宙という市場の陳列棚に置かれた、古雅なる芸術作品を、それによって見せているのである。

次に、風を見よ。そのほかの叡智に満ち、寛大なる利益と役割の証言によって、実に重要で多様な任務へと駆り立てられている。すなわち、その波立ちは、叡智なる創造主による任命であり、統御であり、使用なのである。そして、そのうねりは、主の命令を迅速に果たすために急ぎ働いている姿なのである。

さらに、泉、溪流、河川を見よ。それらが地や山から湧き出るのは、偶然ではない。なぜなら、それらに伴う慈悲の痕跡たる利益と成果の証言によって、また、山々の中に必要の均衡をもって蓄えられていることの表明によって、さらに叡智の均衡をもって送り出されていることの指示によって、それらが叡智ある主の従属と蓄えによるものであることが示されているからである。

そして、その湧き出しは、主の命令に歓喜をもって従っている姿なのである。

さあ、地上に存在するすべての石、宝石、鉱物の種類を見よ。それらの装飾、美しき性質、有益なる特性は、叡智なる創造主の装飾、配列、統御、造形によるものであることを示している。なぜなら、それらが、叡智に満ちた利益、生命の必要、人間の必需、動物の要求に適う仕方では準備されていることが、それを証言しているからである。

次に、花々と果実を見よ。それらの微笑み、その味覚、美しさ、文様、芳香は、寛大なる創造主、慈悲深き恩恵者の食卓における、一つ一つの紹介状、一つ一つの招待状のようなものである。多様な色彩、香り、味覚によって、それぞれの種族に対して、別々の案内と招待として与えられているのである。

さらに、鳥たちを見よ。彼らの語り合いと囀りが、叡智なる創造主によって語らされていることの断固たる証拠は、驚嘆すべき仕方では、その声を通じて互いに感情を交換し、目的を伝達していることである。

また、雲を見よ。雨の滴る音が無意味な響きではなく、雷鳴と稲妻が空虚な轟音ではないことの確固たる証拠は、何も存在しな

い空間の中で、それらの驚異を創造し、そこから生命の水ともいべき滴を搾り出し、地表に住む、必要と渴望に満ちた生命あるものへ飲ませていることである。

それは示している。あの滴る音、あの轟きは、きわめて意味深く、叡智に満ちていることを。まるで寛大なる主の命令によって、渴望する者たちに向かって、「汝らに吉報あれ。我々は来たる」と叫んでいるかのようなのである。

さらに、空を見よ。空に存在する無数の天体の中から、ただ月だけに注目せよ。その運行が、全能にして叡智なる存在の命令によるものであることの証拠は、それに関わる地上への重大な叡智の数々である。それについては他所で説明したため、ここでは簡潔に留める。

このように、光から月に至るまで列挙したこれらの普遍的元素は、きわめて広大な様式と巨大な尺度において、一つの窓を開いている。そして、必然的存在の唯一性、力の完成、統治の威厳を示し、宣言しているのである。

さて、無自覚者よ。もし汝が、この雷鳴のような声を沈黙させることができ、太陽の

光のように明白なこの輝きを消し去ることができるならば、その時こそアッラーを忘れるがよい。さもなくば、正気に立ち返れ

سُبْحَانَ مَنْ تَسْبِيحُ لَهُ السَّمَوَاتُ السَّبْعُ وَالْأَرْضُ وَمَنْ
فِيهِنَّ

と言うがよい。

第二十一の窓

وَ الشَّمْسُ تَجْرِي لِمُسْتَقَرٍّ لَهَا ذَلِكَ تَقْدِيرُ الْعَزِيزِ
الْعَلِيمِ

この宇宙の灯火たる太陽は、宇宙の創造主の存在と唯一性に対して、太陽そのもののように明るく光り輝く窓である。

実に、我々の地球を含む「太陽系」と呼ばれる体系に属する十二の惑星は、その大きさにおいて大小さまざまであり、その位置において遠近さまざまであり、その運動速度においても多種多様であるにもかかわらず、完全なる秩序と叡智のもと、完全なる均衡のうちに、一秒たりとも誤ることなく運行し、公転し、さらに「引力の法則」と

呼ばれる神的法則によって太陽と結びつけられている。

すなわち、それらは、あたかも指導者に従う者のように、太陽に従属しているのである。

この事実は、巨大な尺度において、神的力の威厳と主の唯一性を示している。

なぜなら、本来は無生で無意識なるこれら巨大な塊を、極限に達した秩序と叡智の均衡の中で、多様な形態、多様な距離、多様な運動において回転させ、役務につかせることが、どれほどの力と叡智を証明するものであるか、考えてみよ。

もし、この巨大かつ重大な運行に、微粒子ほどでも偶然が介入したならば、その瞬間、宇宙全体を粉碎するほどの爆発を引き起こすであろう。

なぜなら、もし偶然が一瞬でも、どれか一つを停止させれば、その軸から逸脱する原因となり、他の天体との衝突を招くからである。

地球の千倍もの巨大な天体同士が衝突することの恐るべき様を、汝は想像することができよう。

太陽系、すなわち太陽の従属者であり果実でもある十二の惑星の驚異については、アッラーの包み尽くす知に委ねることとし、ここでは、我々の眼前にあるこの地球だけを見つめよう。

すると我々を見る。この地球という惑星が、主宰の威光の壮大さ、神性の統治の荘厳さ、慈悲と叡智の完成を示す様相のもと、主の命令によって太陽の周囲を巡り（第三の書簡において説明されたように）、きわめて重大な奉仕のために、長大なる旅路へと送り出されていることを。

それは、まるで主の船のように、驚異なる神的被造物によって満たされ、知性を持つ僕たちのためには、観覧の場ともいふべき移動する住居としての姿を与えられている。

また、時刻と計算を知らせる時計の針のように、月もまた、精密なる計算と偉大なる叡智によって、この地球に結び付けられ、しかもその月には、別の軌道における別の運行と旅路が与えられている。

この祝福された惑星のこのような状態は、地球そのものの重みをもつ証言によって、

絶対的全能者の必然的存在と唯一性を証明しているのである。

この地球がこのようなものである以上、太陽系全体についても、そこから推し量ることができよう。

さらに、太陽自身を、その軸の上で回転させ、いわゆる引力と呼ばれる霊的な綱を巻き取るための滑車や糸車のような役割を果たさせること、そして、その霊的な綱によって惑星群を結びつけ、秩序づけること、さらに太陽を、その全惑星と共に、一秒の間に五時間分の距離を進むほどの速度で、ある推定によれば「ヘルクレス座」の方向、あるいは「太陽たちの太陽」の方角へと進ませていること。

これらすべては、永遠の始まりと終わりを支配する威光の主の力と命令によるのである。

あたかも、その主宰の威厳を示すために、命令に従う兵士たる太陽系の軍勢を用いて、一つの壮大な演習を行わせているかのようである。

ああ、宇宙学者殿よ。いったい、どのような偶然が、この営みに介入できるというのか。いかなる原因の手が、ここに届きうる

のか。いかなる力が、これに近づくことができるのか。さあ、汝自身が答えてみよ。

このような威光の王が、自らの無力を示すかのように、その王国に他者を介入させることがありえようか。

とりわけ、宇宙の果実であり、結果であり、目的であり、精髓でもある生命ある存在を、他者の手に委ねることがありえようか。そこに他者の干渉を許すことがありえようか。

ましてや、その果実の中で最も包括的であり、その結果の中で最も完成され、地上の代理者であり、その王の姿を映す客人でもある人間を、放置したままにすることがありえようか。

そして、人間を自然や偶然へと委ね、自らの統治の威厳を無に帰し、その完全なる叡智を失墜させることがありえようか。

第二十二の窓

أَلَمْ نَجْعَلِ الْأَرْضَ مِهَادًا وَ الْجِبَالَ أَوْتَادًا وَ خَلَقْنَاكُمْ
أَزْوَاجًا

فَانْظُرْ إِلَى آثَارِ رَحْمَتِ اللَّهِ كَيْفَ يُحْيِي الْأَرْضَ
بَعْدَ مَوْتِهَا

われらは大地を寢床とし、山々を杭とし、
汝らを対として創造したのではないか。

アッラーの慈悲の痕跡を見よ。かれはいかに
にして、大地をその死後に甦らせるかを。

地球という球体は、一つの頭部のような
ものであり、そこには十万の口が存在する。
そして、それぞれの口には十万の言語があ
り、それぞれの言語には十万の証明が存在
している。

その一つ一つが、多方面にわたって、必然
的存在にして唯一なる方、万物に全能にし
て万物に全知なる威光の主の必然的存在、
その唯一性、その聖なる属性、そして最も
美しき御名を証言しているのである。

実に、地球の創造の始まりを見れば、流動
する液状の物質から石が創られ、その石か
ら土壌が創造されたことがわかる。もしそ
れが液体のままであったならば、居住に適
さなかったであろう。また、その液体が石
となった後、鉄のように硬かったならば、
利用することができなかったであろう。

このような状態を与えたのは、地上の住民たちの必要を見通す、叡智なる創造主の叡智にほかならない。

その後、土の層は山々という杭の上に置かれた。これは、内部変動から生じる地震が、山々によって呼吸され、地球がその運動と役割から逸脱しないためである。また、海による侵食から土地を守るためでもあり、生命あるものの生存に必要な諸資源の宝庫となるためでもある。

さらに、大気を梳き、有害な気体を浄化して、呼吸に適したものとするためであり、水を蓄え保持するためであり、生命に必要な他の鉱物の源泉と基盤となるためでもある。

このような構造は、絶対的全能者、慈悲深き叡智者の必然的存在と唯一性を、きわめて断固として力強く証言している。

さて、地理学者殿よ。これをいったい何によって説明するというのか。

どのような偶然が、この驚異なる被造物で満たされた主の船を、一つの驚異の展示場として、二万四千年の距離を一年のうちに高速で回転させ、その表面に並べられたも

のを、一つとして落とさないようにできる
というのか。

さらに、地表における驚異的な芸術を見よ。
元素は、いかに叡智をもって任務を与え
られていることか。全能にして叡智なる存
在の命令によって、地上に住まうラフマー
ンの客人たちに対し、いかに美しく奉仕し
、その助けへと急いでいることか。

さらに、驚異にして奇異なる芸術に満ちた
、この色彩豊かな地表の顔に描かれた文様
の線を見よ。いかにして、その住民たちの
ために、河川や小川、海や大河、山や丘を
、それぞれの被造物と僕たちにふさわしい
住処と交通手段として整えたことか。

その後、数十万種の植物と無数の動物を、
完全なる叡智と秩序のもとに満たし、生命
を与え、地上を活気づけること、さらに時
折、秩序正しく死によって彼らを解任し、
空にした後、再び「死後の復活」のごとく
秩序正しく満たすこと。

これらすべては、威光ある全能者、完成に
おいて叡智なる存在の必然的存在と唯一性
を、数十万の言語をもって証言しているの
である。

要するに、その表面が驚異なる芸術の展示場であり、奇異なる被造物の集会場であり、存在の隊列の通路であり、僕たちの列の礼拝所であり住処でもあるこの地球は、宇宙全体の心臓のようなものであるがゆえに、宇宙そのものに匹敵するほどの唯一性の光を示しているのである。

さて、地理学者殿よ。この地球という頭部が、十万の口を持ち、それぞれの口が十万の言語をもってアッラーを知らせているにもかかわらず、なお汝が彼を認識せず、頭を自然という泥沼に突っ込んでいるのであれば、自らの罪深さの度合いを考えてみよ。

そして、いかに恐るべき刑罰に値するかを知り、目覚めよ。そして、その頭を泥沼から引き抜くがよい。

آمَنْتُ بِاللَّهِ الَّذِي بِيَدِهِ مَلَكُوتُ كُلِّ شَيْءٍ

と言え。

第二十三の窓

الَّذِي خَلَقَ الْمَوْتَ وَالْحَيَاةَ

生命とは、主の力の奇跡の中でも最も光り輝くものであり、最も美しきものである。

また、それは唯一性の証明の中でも最も強力にして最も明白なものであり、自存なる御方の顕現を映す鏡の中でも、最も包括的にして最も澄み渡ったものである。

実に、生命は、それ単独で、生ける自存者を、そのすべての御名と本質的働きと共に示している。なぜなら、生命とは、多くの属性が混合された一つの光、一つの靈薬のようなものだからである。

七色が光の中に混ざり合い、さまざまな薬効成分が靈薬の中に混合されているように、生命もまた、多くの属性から成り立つ一つの真理なのである。

その真理の中に含まれる属性の一部は、感覚を通じて展開し、顕現する。また、その大部分は、感受という形で自らを感じさせ、生命から湧き出ることによって自らを示している。

さらに生命は、宇宙の統御と運営を支配している糧、慈悲、配慮、叡智を、その内に含んでいる。まるで生命が、それらを背後に従えて、自らの入る場所へ引き寄せるかのようである。

たとえば、生命が一つの身体に入る時、「叡智なる者」の御名もまた顕現し、叡智を

もって、その住処を美しく構築し、整える。同時に、「寛大なる者」の御名も顕現し、その住居を必要に応じて配置し、装飾する。

さらに同時に、「慈悲深き者」の御名の顕現も見られる。それは、その生命の持続と完成のために、多様な恩恵によってそれを慈しむからである。

また同時に、「糧を与える者」の御名の顕現も見られる。それは、その生命の存続と発展に必要な物質的・霊的糧を供給し、その一部を身体の内部に蓄えるからである。

すなわち、生命とは、一つの焦点のようなものであり、多様な属性がその中に入り込み、互いに重なり合い、時には互いそのものとなるのである。

まるで生命は、その全体において知であり、同時に力であり、同時に叡智であり、慈悲であるかのようなのである。

このように、生命はその包括的本性ゆえに、主の本質的働きを映し出す、自存性の鏡となっている。

この秘密ゆえに、生ける自存者にして必然的存在なる方は、生命をきわめて豊かつ潤沢に創造し、広く撒き散らし、顕示され

る。そして、あらゆる存在を生命の周囲に集め、それに奉仕する者とされるのである。

なぜなら、生命の役割は偉大だからである。実に、自存性の鏡となることは、容易なことではなく、ありふれた役割ではないのである。

さて、我々が眼前において常に見ている、この数え切れぬほど次々に現れる新たな生命、そして生命の根源と本体である魂が、突如として無から存在へと呼び出され、送り出されているという事実は、必然的存在にして生ける自存者の必然的存在、その聖なる属性、そして最も美しき御名を、きらめきが太陽を示すように示している。

太陽を認識せず、受け入れない者が、昼を満たしている光そのものを否定せねばならなくなるように、生ける自存者、生命を与え、死を与える唯一性の太陽を認めない者は、地表を、否、過去と未来を満たしている生命ある存在の实在そのものを否定せねばならなくなる。

そして、その者は百倍も獣より低い存在へと堕ち、生命の位階から転落し、無生なる

、最も愚かな無知者と化さねばならないのである。

第二十四の窓

لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ كُلُّ شَيْءٍ هَالِكٌ إِلَّا وَجْهَهُ لَهُ الْحُكْمُ
وَالِيهِ تُرْجَعُونَ

死は、生命と同じく、主宰性の証明である。それは、きわめて強力な唯一性の証拠なのである。

الَّذِي خَلَقَ الْمَوْتَ وَالْحَيَاةَ

この節が示すように、死とは、無、抹消、消滅、虚無、あるいは行為者なき崩壊ではない。むしろ、それは叡智ある行為者による、奉仕からの解任であり、場所の移行であり、身体の交換であり、任務からの休息であり、肉体という牢獄からの解放であり、秩序だった叡智の働きなのである。このことは『第一の書簡』において示された。

実に、地表に存在する被造物、生命あるものの、そして生命に満ちた地表が、叡智なる創造主の必然的存在と唯一性を証言しているように、それら生命あるものは、その死

によって、永遠に生ける存在の永続性と唯一性を証言している。

第二十二の言葉において、死がきわめて強力な唯一性の証明であり、永遠性の証拠であることが説明されているため、ここではその議論をそちらに委ね、ただ重要な一点だけを述べよう。

すなわち、生命ある存在が、その存在によって必然的存在の存在を示しているように、それら生命ある存在は、その死によって、永遠に生ける存在の永続性と唯一性を証言しているのである。

たとえば、地表というただ一つの生命ある存在は、その秩序と状態によって創造主を示している。そして、それが死ぬ時、すなわち冬が白き経帷子によって地表を覆う時、人間の視線はそこから逸らされる。

あるいは、その視線は、去りゆく春という棺の後を追って過去へ向かい、さらに広大な光景を見ることになる。すなわち、一つ一つが力の奇跡である、地表を満たした過去の春たちが、これから訪れる新たな奇跡としての春、生命に満ちた地表としての春の到来を予感させ、その存在を証言しているのである。

それゆえ、それらは、きわめて広大な尺度において、きわめて明白な仕方で、きわめて強力に、威光ある創造主、完成において全能なる方、永遠に自存する方、永遠の太陽の必然的存在、その唯一性、その存続と永遠性を証言している。

そして、その証明はあまりにも明白であるため、人は否応なく、

آمَنْتُ بِاللَّهِ الْوَاحِدِ الْأَحَدِ

と言わざるを得なくなるのである。

要するに、

وَيُحْيِي الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا

この奥義によれば、この生命に満ちた地表は、一つの春において創造主を証言するだけでなく、その死によって、時間の過去と未来という二つの翼に並ぶ力の奇跡へと視線を向けさせるのである。

一つの春の代わりに数千の春を示し、一つの奇跡の代わりに数千の力の奇跡を指し示すのである。

しかも、それら過去の春の一つ一つは、今この春よりもさらに確固として証言している。なぜなら、過去へ去ったそれらは、表

面的原因と共に消え去り、その後に再び同じようなものが現れたからである。

すなわち、表面的原因など無に等しい。唯一、威光ある全能者のみが、それらを創造し、その叡智によって原因へと結び付けて送り出していることを示しているのである。

また、未来に並ぶ生命ある地表たちは、さらに明白に証言している。なぜなら、それらは新たに、無から、虚無から創造され、送り出され、地上に置かれ、役割を果たした後、再び去っていくからである。

さて、自然に執着し、その泥沼に沈み溺れようとしている無自覚者よ。過去と未来のすべてに届く叡智と力を持つ霊的な手を有していないものが、どうしてこの地球の生命に介入できようか。

汝のように、無の中の無にすぎぬ偶然や自然が、これに介入できるというのか。

もし救われたいならば、「自然とは、せいぜい神力的力の記録帳にすぎない。偶然とは、我々の無知を覆う、隠された神적叡智の幕にすぎない」と言い、真理へ近づくがよい。

第二十五の窓

ちょうど、打たれたものが、必ずそれを打った者を示しているように、また、芸術的作品が芸術家を必要とし、子が親を必要とし、下位性が上位性を必然的に伴うように、いわゆる「相対的事象」、すなわち互いなしには存在しえない相対的属性と同様に、この宇宙の個別的存在と全体構造に見られる「可能性」もまた、「必然性」を示している。

さらに、それらすべてに見られる受動性は、一つの行為を示している。また、それら全体に見られる被造性は、創造性を示している。そして、それら全体に見られる多数性と複合性は、唯一性を必然的に要求している。

必然性、行為性、創造性、唯一性は、疑いなく、また必然的に、可能的でも受動的でも、多数的でも複合的でも、被造的でもない存在を必要としている。すなわち、それは、必然的存在であり、行為者であり、唯一であり、創造主である存在である。

ゆえに、疑いなく、宇宙全体に存在するすべての可能性、すべての受動性、すべての被造性、すべての多数性と複合性は、必然

的存在にして、「望むままを行う者」、万物の創造主、唯一にして単一なる御方を証言しているのである。

要するに、可能性から必然性が見え、受動性から行為が見え、多数性から唯一性が見えるように、これらの存在は、かの存在を断固として示している。

同様に、存在の上に見られる被造性や被扶養性のような属性もまた、創造性や糧を与える働きの存在を断固として示している。

そして、これらの属性の存在は、必然的に、また自明の理として、一人の創造者、一人の糧を与える者、慈悲深き創造主の存在を示している。

すなわち、あらゆる存在は、自らが帯びる数百のこの種の属性の言語をもって、必然的存在なる御方の数百の最も美しき御名を証言しているのである。

もしこれらの証言が認められないのであれば、存在に見られるこれらすべての属性を否定しなければならなくなる。

第二十六の窓

(注) この窓は普遍的なものではない。心ある者、愛ある者に特有のものである。

この宇宙の存在たちの表面において、絶えず新たに現れては去ってゆく美と麗しさは、それらが永遠なる美の顕現の、一種の影にすぎないことを示している。

実に、川面に浮かぶ泡が輝いては消え、その後から来るものが、去ったものと同じように再び輝くことによって、永遠なる太陽の光線を映す鏡であることを示しているように、流れゆく時間の河の上で、移ろいゆく存在たちの上に輝く美の閃光もまた、永遠なる美を指し示し、その一種の徴となっているのである。

さらに、宇宙の心臓に宿る真剣なる愛は、永遠なる愛されし存在を示している。

実に、木の本質に存在しないものが、その果実に本質的な形で存在しないことが示しているように、宇宙という樹木の感受性ある果実である人間種に存在する、神的なるものへの真摯な愛は、宇宙全体にもまた、別の形ではあるが、真実の愛と情愛が存在していることを示している。

それゆえ、宇宙の心臓に存在するこの真実の愛と情熱は、一人の永遠なる愛されし存在を示しているのである。

また、宇宙の胸の内に、多様な形で現れている引き寄せ、陶醉、引力は、永遠なる魅力の真理による引力によって生じていることを、目覚めた心に示している。

さらに、被造物の中でも最も繊細で光に満ちた階層である、霊的直観と聖性の人々が、一致して、味わいと直観に基づき、威光と美を備えた御方の顕現に浴していること、また、その威厳にして美なる御方が、自らを知らしめ、愛されようとしていることを、歓喜をもって知ったと一致して語っている。

これもまた、必然的存在なる御方、美と威厳を備えた御方の存在、そして人間に自らを知らしめようとされていることを、断固として証言しているのである。

さらに、宇宙の表面と存在の上で働いている、美化と装飾の筆は、その筆を持つ御方の御名の美しさを、明白に示している。

このように、宇宙の表面にある美、その心臓にある愛、その胸にある引き寄せ、その眼にある直観と目撃、その姿にある麗しさ

と装飾は、きわめて繊細で光り輝く一つの窓を開いている。

その窓によって、すべての美しき御名を持つ、美と威厳の御方、永遠なる愛されし存在、始まりなき崇拝される御方を、目覚めた知性と心に示しているのである。

さて、物質主義の闇、妄想の暗黒、息苦しき疑念の中でもがいている無自覚者よ。目を覚ませ。人間にふさわしい姿へと立ち上がれ。

この四つの孔から見つめよ。唯一性の美を見よ。信仰の完成を得よ。そして真の人間となれ。

第二十七の窓

اللَّهُ خَالِقُ كُلِّ شَيْءٍ وَهُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ وَكِيلٌ

宇宙において、「原因と結果」と見える事物を観察するとき、我々を見る。最も高位にある原因でさえ、最も些細な結果を生み出す力を持っていないことを。すなわち、原因とは一つの幕にすぎず、結果を創造しているのは別の存在なのである。

たとえば、無数の被造物の中から、ただ一つの部分的な例として、人間の頭部の中に、芥子粒ほどの場所に置かれている記憶力を見よ。我々を見る。それが、まるで包括的な一冊の書物、否、一つの図書館のようであり、人間の全生涯の出来事が、混乱なくその中に記録されていることを。

この力の奇跡を、いったいどのような原因によって説明できるというのか。脳の襞によってか。単純で無意識な細胞の粒子によってか。偶然の風によってか。

しかるに、この驚異なる芸術は、人間が復活の日に開かれる巨大な行為録から、清算の時に想起されるために、自らの行為がすべて記録されていることを知らせるべく、一つの小さな写しを作り、それを書き記して、人間の理性の手に渡すような、叡智なる創造主の芸術でしかありえないのである。

人間の記憶力を例として、すべての卵、核、種子を考えてみよ。そして、これら包括的な小さき奇跡に、他のすべての結果を照らし合わせてみよ。

なぜなら、どのような結果、どのような被造物を見ても、その中には驚異的な芸術が

存在しており、その平凡で単純な原因どころか、すべての原因が集まったとしても、その前では無力を示さざるをえないからである。

たとえば、大いなる原因と見なされている太陽を、老練で知性ある存在と仮定して、それに「一匹の蠅を作ることができるか」と尋ねたならば、必ずこう答えるであろう。

。

「私の創造主の恩寵によって、私の工房には光も、色彩も、熱も豊富にある。しかし、蠅の身体には、目、耳、生命のようなものが存在する。それらは、私の工房には存在せず、また私の力の範囲内にもない。」

さらに、結果の中に見られる驚異的な芸術と装飾は、原因を退け、原因の背後にいる「諸原因の創造主」である必然的存在を指し示し、

وَالِيهِ يَرْجِعُ الْأَمْرُ كُلُّهُ

この奥義によって、すべての事柄をかれへ委ねている。

同様に、結果に付随する成果、目的、利益もまた、原因という幕の背後に、寛大なる

主、慈悲深き叡智者の働きが存在することを、自明の理として示している。

なぜなら、無意識な原因が、目的を考えて働くことなどありえないからである。

しかるに、我々を見る。創造されるあらゆる存在が、一つの目的のためではなく、多くの目的、多くの利益、多くの叡智を追求して存在へと至っていることを。

ゆえに、叡智にして寛大なる主が、それらを創造し送り出し、それらの利益を存在理由として与えているのである。

たとえば、雨が降る。雨を表面的に生み出している原因が、動物たちを思いやり、彼らに慈悲を抱くことから、どれほど遠い存在であるかは明らかである。

ゆえに、動物たちを創造し、その糧を保証する慈悲深き創造主の叡智によって、助けとして送られているのである。それゆえに、雨は「慈悲」と呼ばれる。なぜなら、多くの慈悲の痕跡と利益を内包しているため、まるで慈悲そのものが雨という形を取り、滴となり、一滴一滴となって降ってきているかのようだからである。

また、あらゆる被造物の面に微笑みかける、装飾に満ちたすべての植物と動物におけ

る美しい装いと華麗なる顕現は、明白に、不可視の幕の背後にあって、これらの美しく飾られた芸術を通して御自身を知らしめ、愛させ、認識させようとする威光ある御方の必然的存在と唯一性とを示している。

すなわち、諸存在における美しく飾られた有様と華麗なる様相は、御自身を知らしめ、愛させるという属性を、断固として示している。そして、御自身を愛させ、知らしめるといふこれらの属性は、明白に、愛される御方にして知られる御方たる全能の創造主の必然的存在と唯一性とを証言しているのである。

要するに、原因は極めてありふれ、無力なものである一方、それに帰せられている結果は極めて精巧で価値あるものである。それゆえ、その結果の精巧さと価値は、原因をその真の創造者たる地位から退けるのである。

また、その結果が有する目的と利益も、無知で無機的な諸原因を退け、それを叡智ある創造主の御手に委ねるのである。さらに、その結果の表面に現れている装飾と巧みなる技巧は、御自身の力を意識ある者たちに知らしめようとし、御自身を愛させるこ

とを望む、叡智ある創造主を指し示している。

おお、諸原因を崇拜する哀れなる者よ。この三つの重大な真理を、汝はいったい何によって説明できるのか。いかにして自らを欺くことができるのか。理性があるならば、諸原因という幕を引き裂け。

「唯一なる御方、かれに共同者なし」と言え。

そして、無数の妄念から解き放たれるがよい。

第二十八の窓

وَمِنْ آيَاتِهِ خَلَقُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَاخْتِلَافُ
الْسِّنِّكُمْ وَالْوَانِكُمْ إِنَّ فِي ذَلِكَ لَآيَاتٍ لِّلْعَالَمِينَ

この宇宙を見れば、我々はそこに、身体の細胞から始まり、宇宙全体にまで及ぶ叡智と秩序を見る。

身体の細胞を見れば、身体の利益を見守り統御する一者の命令と法則によって、あの微小な細胞の中にさえ、重大な統治が存在していることが分かる。たとえば、食物の一部が、必要な時のために脂肪として蓄え

られるように、まさに同様の統御と蓄積が、あの微細な細胞の中にも存在している。

植物を見れば、きわめて叡智に満ちた養育と統御を見る。動物を見れば、極限にまで寛大な養育と糧の供給を見る。

宇宙の巨大なる諸構成要素を見れば、重大な目的のための、威厳に満ちた運行と照明を見る。

さらに、世界全体を見れば、それは秩序正しい国家、都市、宮殿のごとく、高遠なる叡智と重大な目的のために、完全なる配置と秩序を備えていることが分かる。

第三十二の言葉・第一の立場において説明され証明されたように、微粒子から星々に至るまで、微塵ほどの多神性の余地も存在しない。なぜなら、それらは互いに靈的な連関を持ち、全ての星々を従わせ、その掌中に収めることのできぬ者は、一つの微粒子に対してすら、自らの主宰を従わせることができないからである。

一つの微粒子の真の主であるためには、すべての星々の所有者でなければならない。

また、第三十二の言葉・第二の立場において説明され証明されたように、天を創造し

整える力を持たぬ者は、人間の顔における個別性を形成することはできない。

すなわち、全天の主でない者は、一人の人間の顔に刻まれた識別の印章たる、この天上的文様を造ることはできないのである。

これこそ、宇宙そのもののほど巨大な一つの窓である。この窓を通して見れば、

اللَّهُ خَالِقُ كُلِّ شَيْءٍ وَهُوَ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ وَكِيلٌ لَهُ
مَقَالِيدُ السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ

この啓示句が、宇宙という書物の頁に、大文字で記されていることを、理性の眼によっても見ることができるのである。

ゆえに、これを見ぬ者は、理性を欠くか、心を欠くか、あるいは人間の姿をした獣にすぎぬのである。

第二十九の窓

وَإِنْ مِنْ شَيْءٍ إِلَّا يُسَبِّحُ بِحَمْدِهِ

ある春の季節、私は孤独に、思索を抱きつつ旅をしていた。丘の麓を通り過ぎる時、一輪の鮮やかな黄色い花が目にとまった。

それは、かつて故郷や他国で見た、同じ種類の黄色い花々を思い起こさせた。

その時、次のような意味が心に浮かんだ。

この花が、誰かの房飾りであり、誰かの印章であり、誰かの封印であり、誰かの文様であるならば、地上全体に咲くこの種の花々もまた、その方の封印であり、印章であるに違いない。

この封印の想念の後に、さらに次のような観念が訪れた。

いかにも、封印を押された一通の手紙は、その封印によって持ち主を示している。同様に、この花もまた、一つの慈悲なる者の的封印である。

多様な文様と、意味に満ちた植物の行によって書き記されたこの丘もまた、この花の創造主の手紙なのである。

さらに、この丘そのものもまた、一つの封印である。この荒野と平原は、一通のラフマーンの書簡の姿を帯びている。

この観念から、次の真理が心に浮かんだ。

すべての存在は、一つの主の封印のようなものであり、万物を自らの創造主へ帰属さ

せている。そして、自らが、その書き手の手紙であることを証明している。

すなわち、あらゆる存在は、一なる唯一者へと万物を帰属させる、一つの唯一信仰の窓なのである。

ゆえに、すべての存在、とりわけ生命あるものの中には、その存在をこのように意味深く刻み込んだ方だけが、万物を創造するほどの、驚異的文様と奇跡的芸術が存在している。そして、万物を創造する方のみが、必ずその一つをも創造しているのである。

したがって、万物を創造できぬ者は、ただ一つの存在すら創造することはできない。

さて、無自覚者よ。この宇宙の表面を見よ。それは、互いの内に無数のサマダ的書簡を含む存在の頁であり、あらゆる書簡の上には、無数の唯一性の印章が押されている。

これらすべての封印の証言を、いったい誰が否定できようか。いかなる力が、それらを沈黙させることができようか。

心の耳をもって、そのどれに耳を傾けても、

أَشْهَدُ أَنْ لَا إِلَهَ إِلَّا اللَّهُ

と語っているのを聞くであろう。

第三十の窓

لَوْ كَانَ فِيهِمَا آلَهِ إِلَّا اللَّهُ لَفَسَدَتَا * كُلُّ شَيْءٍ
هَالِكٌ إِلَّا وَجْهَهُ لَهُ الْحُكْمُ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ

この窓は、可能性と生成を基礎として論証を行う、すべての神学者たちの窓であり、必然的存在の証明へ至る大道である。

その詳細については、『マワーキフ註釈』や『マカーシド注釈』のような、探究者たちの大著に委ねることとし、ここではただ、クルアーンの靈溢と、この窓から魂に届いた一、二の光芒のみを示そう。

いかにも、命令権と支配権の本質は、競合者を認めず、共同支配を拒み、介入を排除することである。

それゆえ、小さな村に二人の村長がいれば、その村の平穩と秩序は乱される。一つの地方に二人の長官、一つの州に二人の総督がいれば、混乱が生じる。一つの国家に二人の王がいれば、嵐のような混沌が起こる

。

しかるに、支配と命令の影にすぎぬ、弱々しい影、部分的な模像にすぎぬものですら、助けを必要とする無力な人間の世界において、かくも競争者や敵対者や同類の介入を認めないのであれば、絶対王権の形を取る支配、そして主宰の位階における命令権において、絶対的全能者における「介入排除の法則」が、いかに根本的な仕方でのその効力を発揮しているかを推し量れ。

すなわち、神性と主宰における、最も断固として永続的な必然とは、唯一性と独一性なのである。

このことの明白なる証拠、決定的証人こそ、宇宙における完全なる秩序と、最上の調和である。

蠅の羽から、天の灯火たる星々に至るまで、そこには実に精妙なる秩序が存在している。その前で理性は、驚嘆と賛美のあまり、

「スプハーナッター（アッラーはいかに清らかで至高なることか）、マーシャーアッラー（アッラーの御望みのままに）、バーラカッター（アッラーの祝福あれ）」

と言って、ひれ伏すのである。

もし微塵ほどでも共同者の入り込む余地があり、介入が存在したならば、

لَوْ كَانَ فِيهِمَا آلَٰهَةٌ إِلَّا اللَّهُ لَفَسَدَتَا

この尊き啓示句の示すとおり、秩序は崩れ、形態は変わり、腐敗の痕跡が現れていたであろう。

しかるに、

فَارْجِعِ الْبَصَرَ هَلْ تَرَىٰ مِنْ فُطُورٍ ثُمَّ ارْجِعِ الْبَصَرَ
كَرَّتَيْنِ يَنْقَلِبْ إِلَيْكَ الْبَصَرُ خَاسِئًا وَهُوَ حَسِيرٌ

この啓示の示すとおり、人間の視線が欠陥を探し求めてどれほど努力しても、どこにも欠陥を見出せず、疲れ果てたまま、その帰着点である眼へ戻り、そして自らを送り出した批判的理性に向かって、

「無駄に疲れたただけであった。欠陥は存在しない」

と言わざるをえないのである。

これによって示されるのは、秩序と整合が、極限まで完全であるということである。

すなわち、宇宙の秩序は、唯一性の断固たる証人なのである。

さて、「生成」の議論に移ろう。神学者たちは次のように述べた。

「世界は変化する。変化するものはすべて生成したものである。そして、あらゆる生成したものには、それを生成させた存在、すなわち創造者が存在する。ゆえに、この宇宙には永遠なる創造者が存在する。」

我々もまた言う。まことに宇宙は生成したものである。なぜなら、我々は見ているからである。あらゆる時代に、否、あらゆる年に、否、あらゆる季節に、一つの宇宙、一つの世界が去り、別のものが到来することを。

すなわち、威光ある全能者が存在し、この宇宙を無から創造し、毎年、否、毎季節、否、毎日、新たな宇宙を創造して、知性ある者たちに示し、その後それを取り去り、別のものをもたらしめているのである。そして、それらを鎖のようにつなぎ、時間という帯の上に掛けていているのである。

実に、この世界の中で、更新される一つ一つの宇宙のような存在である毎春、我々の目の前に無から現れ、そして去っていく宇宙は、全能者の力の奇跡なのである。

そして、この世界の中で絶えず世界を創造し、変化させるその存在こそ、必ずやこの宇宙をも創造したのであり、この世界と地

表とを、その偉大なる客人たちのための宿として造ったのである。

次に、「可能性」の議論に移ろう。神学者たちは次のように述べた。

「可能的存在とは、存在と非存在の双方が等価である状態をいう。すなわち、存在してもよく、存在しなくてもよい。ゆえに、それを特定し、選び出し、存在へ導く者が必要となる。なぜなら、可能的存在は互いに創造し合うことによって無限連鎖を形成することはできず、また、互いに創造し合って循環することもできない。したがって、これらを創造する必然的存在が存在する。」

彼らは、循環と無限連鎖を否定する十二の有名な決定的論証によって、「循環」を無効とし、「無限後退」を不可能であると示した。その論証群は、「玉座的論証」や「階梯的論証」などの名称で呼ばれている。そして原因の連鎖を断ち切ることによって、必然的存在の存在を証明したのである。

我々もまた言う。原因が、無限連鎖を否定する論証によって宇宙の果てで断ち切られることを示すよりも、あらゆる存在の中に、「万物の創造主」に固有の印章を見出す

方が、より断固としており、より容易である。

クルアーンの靈的恩沢によって、すべての「窓」と、すべての「言葉」は、この原理に基づいて進められてきた。

とはいえ、「可能性」の論点には、無限の広がりがある。それは無限の方向から、必然的存在の存在を示している。神学者たちの「無限連鎖の断絶」という道、実に広大で壮麗なるその大道だけに限定されるものではない。むしろ、数え切れぬほど多くの道によって、必然的存在の認識へと開かれているのである。

すなわち、あらゆる存在は、その存在において、その属性において、その存続期間において、無限の可能性、すなわち数え切れぬほど多くの方向と在り方の間で揺れ動いている。

しかるに、我々を見る。その無限の可能性の中から、存在として秩序ある一つの道が選ばれていることを。また、それぞれの属性が、固有の仕方与えられていることを。そして、その存続期間において変化するすべての属性と状態もまた、このような特定によって与えられていることを。

すなわち、それは、特定する者の意志によって、選び出す者の選択によって、叡智ある創造者の創造によってこそ、無限の道の中から叡智に満ちた一つの道へと導かれ、秩序ある属性と状態を与えられているのである。

その後、その存在は単独性から引き出され、一つの複合体の一部分とされる。すると可能性はさらに増大する。なぜなら、その複合体の中では、数千通りの在り方がありうるからである。

しかるに、その無限ともいえる状態の中から、結果を伴う特定の位置が与えられ、重要な成果と利益、その複合体における役割を果たさせられている。

さらに、その複合体自体もまた、別の複合体の一部分とされる。すると可能性はさらに増大する。なぜなら、そこでもまた数千通りの在り方がありうるからである。

しかるに、その数千の可能性の中から、ただ一つの状態が与えられている。そして、その状態によって重要な役割が果たされているのである。

このように進むにつれて、ますます断固として、叡智ある統御者の必然的存在が示さ

れていく。そして、それが全知なる命令者の命令によって導かれていることを告げ知らせるのである。

物体の中に物体があり、その内部に部分が入り込みながら続いていく、これらすべての複合体においては、ちょうど一人の兵士が、小隊、中隊、大隊、連隊、師団、軍隊という互いに重なり合う組織のそれぞれにおいて、固有の任務、叡智ある関係、秩序だった奉仕を持っているようなものである。

また、汝の瞳の中にある一つの細胞にも、眼球の中における固有の関係と役割がある。さらに、それは、汝の頭部全体との関係においても、叡智に満ちた役割と奉仕を担っている。もし微塵でも誤れば、身体 of 健康と統御は崩れてしまう。

さらに、その細胞には、血管に対する役割、感覚神経や運動神経に対する役割、さらには身体全体との関係における、固有の任務と叡智ある配置が存在している。

数千もの可能性の中から、叡智ある創造主の叡智によって、その特定の位置が与えられているのである。

同様に、この宇宙に存在するすべての被造物は、それぞれが、その本体によって、その属性によって、無数の可能性の道の中から、固有の存在、叡智に満ちた形態、有益なる属性を与えられている。そのことによって、必然的存在を証言している。

さらに、それらが複合体の中へ組み込まれる時、それぞれの複合体の中で、また別の言語によって、その創造主を宣言するのである。

そして次第に、最も巨大な複合体に至るまで、その関係、役割、奉仕という観点から、叡智ある創造主の必然的存在、その選択、その意志を証言する。

なぜなら、一つの存在を、あらゆる複合体との叡智に満ちた関係を保ちながら配置できる者は、それらすべての複合体の創造主でありうるからである。

すなわち、一つの存在は、数千の言語によって、その存在を証言していることになる。

実に、宇宙の被造物の数だけではなく、むしろ被造物の属性と複合体の数だけ、「可能性」という観点から、必然的存在の存在に対する証言が到来しているのである。

さて、無自覚者よ。宇宙を満たしているこれらの証言、これらの声を聞かぬとは、どれほど耳が塞がれ、理性を失っていなければならぬことか。

さあ、汝自身が答えるがよい。

第三十一の窓

لَقَدْ خَلَقْنَا الْإِنْسَانَ فِي أَحْسَنِ تَقْوِيمٍ * وَ فِي
الْأَرْضِ آيَاتٌ لِلْمُوقِنِينَ وَ فِي أَنْفُسِكُمْ أَفَلَا تُبْصِرُونَ

この窓は、人間の窓であり、内面的世界に属する窓である。そして、この内面的側面における詳細については、数千に及ぶ探究的聖者たちの詳細な書物に委ね、ここではただ、クルアーンの恩沢から受け取った幾つかの根本のみを示そう。

すなわち、第二十一の言葉において説明されたように、

「人間とは、包括的な一つの縮図であり、アッラーは御自身のすべての御名を、人間自身を通して人間に感得させている。」

その詳細については他の「言葉」に委ね、ここでは三つの点のみを示す。

第一の点

人間は、三つの側面において、神の御名を映す鏡である。

第一の様相は次の通りである。

夜の闇が光を示すように、人間もまた、自らの弱さと無力さ、貧しさと必要、欠陥と不足によって、威光ある全能者の力、強さ、豊かさ、慈悲を示している。そして同様に、多くの神的属性に対して、この仕方で鏡となっているのである。

実に、人間は、自らの無限の無力さと極度の弱さの中で、無数の敵に対抗するための支えを求めることによって、その良心が常に必然的存在へと向かう。

また、人間は、その無限の貧しさと必要の中で、無限の目的に対して助けを求める拠点を探さざるを得ないため、その良心は常に、豊かにして慈悲深き存在の御前へと寄りかかり、祈りによって両手を差し伸べるのである。

すなわち、あらゆる良心の中には、この「支えを求める点」と「助けを求める点」という二つの小さな窓が存在し、それらは全能にして慈悲深き存在の慈悲の御前へと開かれている。そして人間は、常にそれによ

ってかれを見つめることができるのである。
。

第二の鏡としての側面は次の通りである。

人間に与えられた、部分的な知識、力、視覚、聴覚、所有、統治といった諸能力は、一つの見本として、宇宙の主の知識、力、視覚、聴覚、主宰としての統治を映し出す鏡となっている。そして、それらを理解し、伝えているのである。

たとえば、私はこの家をどのように建てたかを知り、それを見ており、その所有者であり、それを管理している。

同様に、この巨大な宇宙という宮殿にも、一人の建築者が存在する。その建築者は、それを知り、見て、造り、統治しているのである。その他もまた同様である。

第三の鏡としての側面は次の通りである。

人間は、その上に刻まれている神の御名の紋様を映し出す鏡である。

第三十二の言葉・第三の立場の冒頭で、わずかに説明されたように、人間の包括的本性の中には、七十を超える神の御名の紋様が顕れている。

たとえば、その創造そのものから、「造形者」や「創造主」の御名を示し、その最も美しき形態から、「慈悲あまねき者」や「慈愛深き者」の御名を示し、その美しき養育から、「寛大なる者」や「繊細なる恩寵者」の御名を示している。

その他もまた同様である。

人間は、そのすべての器官と機能、その装置と四肢、その精妙な能力と精神性、その感覚と知覚によって、それぞれ異なる御名の、異なる紋様を示しているのである。

すなわち、御名の中に「至高の御名」が存在するように、その御名の紋様の中にもまた「至高の紋様」が存在する。そして、それこそが人間なのである。

おお、自らを人間であると知る人間よ。己自身を読め。

さもなくば、動物や無機物のような存在としての人間になってしまうおそれがある。

第二の点

これは、「唯一性」の重大なる神秘を指し示している。

すなわち、人間の魂が、その身体全体に対していかなる関係を持っているかを見よ。

魂は、身体のすべての器官と部分とを互いに助け合わせている。

すなわち、神の意志の顕現である創造的命令、そしてその命令に外的存在を与えられた命令的法則、さらに主からの精妙なる存在である魂は、それらを統御するにあたり、各部分の内なる声を感じ取り、その必要を見分ける際、互いに妨げ合うことも、魂を混乱させることもない。

魂にとって、遠いものと近いものは同じである。互いに遮蔽物とはならない。

もし望むならば、多くの器官を、一つの器官の援助のために送り出すこともできる。また、身体のあらゆる部分によって知り、感じ、統御することもできる。

さらに、もし大いなる光明性を獲得すれば、身体のあらゆる部分によって見、聞くことさえできる。

同様に、

وَلِلَّهِ الْمَثَلُ الْأَعْلَى

実に、アッラーの命令の法則の一つである魂が、小宇宙たる人間の身体とその器官において、このような状態を示しているのであれば、大宇宙たるこの宇宙において、必

然的存在であるアッラーの普遍的意志と絶対的力に対して、無数の行為、無数の声、無数の祈り、無数の働きが、いかなる意味においても重荷となることはなく、互いに妨げ合うこともない。

それらは、威光ある創造主を忙殺すること、混乱させることもない。

かれは、すべてを同時に見、すべての声を同時に聞く。

近いものも遠いものも同じである。

もし望むならば、すべてを一つの存在の援助のために送り出すこともできる。

また、あらゆるものによって、あらゆるものを見、あらゆる声を聞き、あらゆるものによって、あらゆるものを知るのである。その他もまた同様である。

第三の点

生命には、極めて重大な本質と、重要な役割が存在する。

しかし、その議論については、「生命の窓」および『第二十の書簡』第八の言葉において詳細に述べられているため、そこへ委ねることとし、ここではただ次のことのみを注意として示そう。

生命の中で、感覚として沸き立つ混合された紋様は、多くの神の御名と、本質的諸作用を指し示している。

そして極めて明白な形で、「永生にして自存なる御方」の本質的諸作用を映し出す鏡となっている。

この神秘の説明については、まだアッラーを知らぬ者たち、あるいは完全には確信していない者たちに対して語る時ではないため、ここで扉を閉じることとする。

第三十二の窓

هُوَ الَّذِي أَرْسَلَ رَسُولَهُ بِالْهُدَىٰ وَدِينِ الْحَقِّ لِيُظْهِرَهُ
عَلَى الدِّينِ كُلِّهِ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ شَهِيدًا
قُلْ يَا أَيُّهَا النَّاسُ إِنِّي رَسُولُ اللَّهِ إِلَيْكُمْ جَمِيعًا الَّذِي
لَهُ مُلْكُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ لَا إِلَهَ إِلَّا هُوَ يُحْيِي وَ
يُمِيتُ

この窓は、使徒性という天空の太陽、否、諸太陽の太陽たる、預言者ムハンマド عليه الصلاة والسلام の窓である。

この極めて輝かしく、極めて巨大で、極めて光に満ちた窓が、第三十一の言葉である

『昇天の書』、第十九の言葉である『ムハンマドの預言性 عليه الصلاة والسلام の書』、そして十九の徴を含む『第十九の書簡』において、いかに光明に満ち、明白であるかが証明されているため、ここではそれらの「言葉」と「書簡」、そして『第十九の書簡』の第十九の徴を想起するに留め、その説明をそこへ委ねて、ただ次のことのみを述べよう。

唯一性の「語る証明」である、ムハンマド的存在 عليه الصلاة والسلام は、使徒性と聖者性という二つの翼によって、すなわち、自ら以前のすべての預言者たちの集団的伝承による一致と、自ら以後のすべての聖者たちと真理探究者たちの一致した伝承を包含する力によって、その生涯全体において、全力をもって唯一性を示し、それを宣言したのである。

そして、イスラーム世界のように広大で、輝かしく、光に満ちた窓を、アッラー認識へ向かって開いたのである。

イマーム・ガザーリー、イマーム・ラッバーニー、ムフィッディーン・イブン・アラビー、アブドゥルカーディル・ギーラーニーのような、数百万に及ぶ真理探究者たち

と誠実なる者たちは、この窓から見つめ、
また他者にもそれを示してきたのである。

さて、このような窓を閉ざしうる幕など存在するであろうか。

また、この窓から見ようとせず、それを非難する者に、果たして理性があると言えるであろうか。

さあ、汝自身が答えるがよい。

第三十三の窓

الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي أَنْزَلَ عَلَى عَبْدِهِ الْكِتَابَ وَلَمْ
يَجْعَلْ لَهُ عِوَجًا قِيمًا * الر كِتَابٌ أَنْزَلْنَاهُ إِلَيْكَ
لِتُخْرِجَ النَّاسَ مِنَ الظُّلُمَاتِ إِلَى النُّورِ

これまでのすべての窓は、クルアーンという海からの幾つかの雫にすぎないと考えよ。
。

そうすれば、クルアーンの中に、生命の水にも等しい唯一性の光が、いかに無数に存在しているかを推し量ることができるであろう。

しかるに、これらすべての窓の源泉であり、
、鉱脈であり、根源であるクルアーンを、

たとえ極めて簡潔に、極めて素朴な仕方で見つめるだけであっても、それなお極めて輝かしく、光に満ちた、包括的な一つの窓なのである。

その窓が、いかに断固としており、輝かしく、光明に満ちているかについては、第二十五の言葉である『クルアーンの奇跡性の書』、および『第十九の書簡』第十八の徴に委ねる。

そして、我々は、クルアーンを我々へ送られた威光ある御方の「慈悲の玉座」に祈願して言う。

رَبَّنَا لَا تُؤَاخِذْنَا إِنْ نَسِينَا أَوْ أَخْطَأْنَا * رَبَّنَا لَا تَزِغْ
قُلُوبَنَا بَعْدَ إِذْ هَدَيْتَنَا * رَبَّنَا تَقَبَّلْ مِنَّا إِنَّكَ أَنْتَ
السَّمِيعُ الْعَلِيمُ * وَتُبْ عَلَيْنَا إِنَّكَ أَنْتَ التَّوَّابُ
الرَّحِيمُ

結語

この三十三の窓を有する『第三十三の書簡』は、信仰を持たぬ者を、インシャーアッラー、信仰へ導くであろう。

信仰の弱き者の信仰を強めるであろう。

強固ではあるが模倣的な信仰を持つ者の信仰を、確証に基づく信仰へ変えるであろう。

確証に基づく信仰を持つ者の信仰を、さらに広げるであろう。

そして、その信仰が広がった者には、真実なるすべての完成の基盤であり根源である「アッラーの認識」における進歩を与え、より光に満ちた、より輝かしい景観を開示するであろう。

それゆえ、「一つの窓だけで十分である」と言うことはできない。

なぜなら、もし汝の理性が満足し、その取り分を得たとしても、心もまた自らの取り分を求めるからである。魂もまた、自らの取り分を求める。

さらに、想像力ですら、その光から自らの取り分を求めるであろう。

ゆえに、それぞれの窓には、それぞれ異なる益が存在するのである。

『昇天の書』において、本来の語りかけの対象は信仰者であり、不信者は第二次的に聞く立場にあった。

しかし、この書簡においては、語りかけの対象は否定者であり、信仰者は聞く立場に置かれている。

このことを理解し、そのようにして読むべきである。

しかしながら、残念なことに、ある重大な事情のため、この書簡は極めて急いで書かれた。しかも、なお草稿の状態のまま残されている。

したがって、私自身に属する表現の仕方には、混乱や欠点が存在するであろう。

ゆえに、兄弟たちには、寛容の眼差しをもってこれを読み、もし可能であれば訂正を加え、そして赦しをもって私のために祈ってくれることを願う。

وَالسَّلَامُ عَلَى مَنْ اتَّبَعَ الْهُدَى وَالْمَلَامُ عَلَى مَنْ اتَّبَعَ
الْهَوَى

سُبْحَانَكَ لَا عِلْمَ لَنَا إِلَّا مَا عَلَّمْتَنَا إِنَّكَ أَنْتَ الْعَلِيمُ
الْحَكِيمُ

اللَّهُمَّ صَلِّ وَسَلِّمْ عَلَى مَنْ أَرْسَلْتَهُ رَحْمَةً لِلْعَالَمِينَ
وَعَلَى آلِهِ وَصَحْبِهِ وَسَلِّمْ آمِينَ

